OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『しぐれ』考
Author(s)	箕浦, 尚美
Citation	詞林. 1999, 25, p. 69-77
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67431
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『しぐれ』考

箕浦　尚美

一

永正十七年（一五二〇年）の写本があり、奈良絵本や刊本など伝本も多いお伽草子『しぐれ』は、中世から近世にかけて広く流布した物語だったと想像される。まず、便宜上、『しぐれ』の梗概を、平出鏗二郎氏『近古小説解題』（大日本図書、一九〇九年）の「雨やどり（一名しぐれのえん又しぐれの草子又しぐれ物語）」解題によって示す。なお、私に段落を改めてある。

二条万里小路の左大臣殿に姫君あり、女御に参るべき仰をうけしが、病の心地して、清水寺に参籠しければ、兄の中将さねあきらその安否を問はんため清水寺に至りしに、俄に時雨降り出だし、三条東洞院に住まへりし中納言きんかねの娘の傘なくして困りけるを見、己がさしたる傘を貸し与ふ。これが縁となりて、遂にこの姫を己が家に迎へて、契浅からず。

しかるに左大臣殿あるとき左大将と約束して、中将に左大将の娘をもつて娶すことに定む。中将はもとより三条殿の姫君との契深くして、左大将の女のもとに通ふことを好まざりしかば、左大将その北の方と謀りて呪詛することありしによりて、中将心惑ひて、今は三条殿の姫君のことは忘れたるもの、ごとく、左大将の姫君のもとにとゞまりて明し暮す。

三条殿の姫君これを嘆き悲しむのみなりしが、やがて己が召使へる侍従といふもの、伯母に、丹後内侍といふものあるをたよりて身を託す。もとこの三条殿の姫君は七歳のとき女御の宣旨を蒙りたれど、早く父母に死に別れたれば、その事おのづから止みたるさまなりしものなるが、丹後内侍あるとき時の帝にこの姫の己が家にある由を内奏したりしかば、帝これを召さんとしたまふ、姫君は只管中将のことをのみ恋ひ慕ひて泣くのみ。帝強ひてこれを女御に召され、承香殿に置かる。これよりさき左大臣の姫君もまた女御に召されて、麗景殿に置かる。されど帝は承香殿にのみ通はせられて、寵愛浅からず。

さねあきらの中将は帝が妹の麗景殿に通はせらるゝことなきを快からず思ひて、出仕することなかりしかば、帝怒りてこれを召させたまふ。中将途にさきに己を呪詛せし形代あるを見出し、始めて己が計られしことを悟り、更に当時寵愛限なき承香殿のかの三条殿の姫君なることを知り、大いに慚ぢて、髪をきりて承香殿に贈り、俄に叡山の横川に入りて仏門に入る。

左大将の姫君もこれを聞きて剃髪し、左大臣もまた出家せらる。承香殿のみは寵幸いよ〳〵盛んに、皇子二人、皇女二人を生み、遂に皇后の位にのぼり栄ゆることを作れり。（中略）

終に、「ひめ君の御くわほう中将殿のまことのみちもこれみなきよ水のくわんのんの御りしやうなり、…かゝることを見きくにつけても、いよ〳〵きよ水のくわんおんをしんずべし〳〵。」とあり。

「しぐれ」のように、身分は卑しくないが不遇な生活を送っていた女君が男君に見いだされて一度は幸せになるものの男君の政略結婚のために犠牲となるというプロットを持つ物語は多く存在し、〈しのびね型〉物語と呼ばれている。〈しのびね型〉の物語には、「しのびね物語」をはじめ、「あきぎり」「兵部卿物語」「雨やどり」などの擬古物語、「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」「扇流し」などのお伽草子が含まれる。このような物語が多く存在するのは、〈しのびね型〉という悲恋的な内容とともに、物語の類型化という安定感が好まれたためでもあると思われるが、類似した物語が次々に生み出される状況においては、それぞれの物語の独創性も要求されたことであろう。

本稿で扱う「しぐれ」の場合、女君の入内と男君の出家という末尾の部分まで「しのびね物語」と同じ展開であり、文辞にも直接的な関係が認められる。現存「しのびね物語」と共通する歌が含まれるほか、現存「しのびね物語」になく、「風葉和歌集」によってのみ知られる和歌もあり、古「しのびね物語」との関わりさえ想定される。[1] 散逸「恋に身かふる」の改作物語である可能性[2]や、擬古物語「あきぎり」との影響関係[3]など、様々な問題も考慮に入れるべきではあるが、〈しのびね型〉物語の根幹である「しのびね物語」との直接関係が確かであることから、「しぐれ」の分析は、〈しのびね型〉物語群における一作品の独自性を明らかにするばかりでなく、擬古物語的お伽草子の成立過程を解明することにも繋がると思われる。

二

「しぐれ」が「しのびね物語」と大きく違う点は、冒頭の男女の邂逅の場面が「しのびね物語」の「源氏物語」（若紫巻）を思わせる垣間見による出会いではなく、中世の信仰史に大

きな位置を占める清水寺が舞台となっていること、恋の呪詛である男祭を行っていることなどである。そうした趣向に「しぐれ」の新しさがあると言ってよい。[4] しかし、新しさは趣向のみにあるのではない。『しのびね物語』にこれらの趣向を加えただけでは「しぐれ」は生まれてこないのである。

『しのびね物語』はあくまでも悲恋の物語で、たとえ、「しぐれ」と同じように女君のみが繁栄するという結末を持っていても、悲哀の情感こそがその主題ととらえられる。しかし、「しぐれ」にはそのような悲壮感はない。神野藤昭夫氏が、

「しぐれ」では〈しのびね〉的悲嘆も決然たる悲恋遁世も、物語世界形象の緊張感からは主題といえなくなっており、むしろ〈出会い→妨害と出奔→さすらい→再会と出離→栄華による鎮魂〉という一連の構造をもつ物語としてパッケージされて、そこに沈められた構造が他の室町時代物語群と通底するものに変容してきている。[5]

と述べておられるように、「しぐれ」は〈しのびね型〉というプロットであっても、決して、悲恋を中心とした構成にはなっていないことに、まずは気付かねばならない。

三

〈しのびね型〉の悲恋を効果的に描くには、男君と権門の姫君との結婚が問題になる場面より前に、男君と女君の親密性を十分に叙述しておく必要がある。『しのびね物語』では二人の間に子供まで登場させるが、「しぐれ」の場合、二人の出会いから男君の政略結婚までにわずか数ヶ月しかない。その上、女君の方は、清水別当の求婚から逃れて不安な思いで男君のもとへ来たという事情を持つにも関わらず、女君の男君に対する心情がほとんど記されていない。僅かに女君が男君邸へ迎えられた翌日の交流が、乳母子「侍従」を介しつつ描かれるのみで、「かくて、思ふことなくて明かし暮らし給ふところに、」（一二頁）[6]と、女君が男君に惹かれてゆく過程などは描かれないまま、男君の政略結婚の場面になる。しかし、女君の心情にそれほど無関心であっても、女君の乳母子「侍従」と男君との会話や、男君の乳母「春日」とその娘で女君に仕えることになった「おとい」の心情などは具体的に記されている。『しぐれ』では、全体を通して、乳母や乳母子の心情が多く叙述されており、それが物語を展開させる力となっていると考えられる。

以下、乳母親子に焦点を当てた『しぐれ』の叙述方法を、『しのびね物語』と共通する場面を比較することによって確認してゆく。

・その夜はちからなくとゞまり給ひて、あしたとく出給ふ。姫君は「かくはやうは出給ふ、殿の御けしきわるかんなるを、今ちともおはせよかし。みづからは心やすくまちはべらん、よのわづらはしきこそくるしけれ」とて、

らうたげにうちなみだぐみ給ふ。(『しのびね物語』四七頁)[7]

・八声の鳥も鳴きければ、「夕さりはとく参らむ」とて出給ひぬ。姫君、御乳母に至るまで心得難くあさましくぞおぼしめす。御車寄せさせて古郷へと急がれける。

降りさせ給へば御乳母走り出て、「いかにや、御けしからず。未だ夜深に御返り候ぞ」と申せば、

(『しぐれ』一八頁)

これは、女君を思うあまり、正妻のもとへ通うのを厭う男君が、夜も明けない内に女君のもとへ戻ってきた場面である。『しのびね物語』では女君が正妻と男君の関係を気遣った言葉を発しているが、『しぐれ』では、女君ではなく乳母の発言となっている。

次の場面の男君は、正妻のもとへ三日間通わねばならないということを、『しのびね物語』では女君に、『しぐれ』では「おとい」に告げている。

・その夜も又車まゐりて、「とく出給へ」とあれば、「三日はちからなくまかりなん。そのゝちはたゞ心にまかすべき」とて出給ふ。こゝろことにつくろひたてられてゐたまへるさま、かの人のなみだにしづみて、ひきだにつくろひ給はぬさまに、おもひくらぶれば、めにもつき給はず。

(『しのびね物語』四六頁)

・御車寄まで侍従、おとひを召し具して、「やがて帰るべし。返らむまでは二人ながら御側に候て慰め参らせよ。親いかに仰せらるゝとも、三夜ならでは行まじきぞ。

(『しぐれ』二〇頁)

このように、本来、女君と男君との間で交わされるべき台詞まで乳母親子に譲ってしまう『しぐれ』において、女君の心情が重視されていたとは言えまい。

また、『しのびね物語』では「いかなる野山のすゑまでも」という言葉が男君の女君に対する心情を示す場面で多く用いられているが[8]、『しぐれ』では、同じ表現が、男君の屋敷から去ってゆく女君を引き留めようとする「おとい」の言葉として用いられている。慣用句として珍しくなかったためとも考えられるが、『しのびね物語』を下敷きにしたと考えられる『しぐれ』において男君ではなく従者の言葉として使われている点には留意してよいだろう。

・「いかなることありとも露かはるまじきを、しばし御らんじさだめざらむほど、心やおきたまふべきことわりなれど、げにかよひありくこともかなはずは、いかなる野山のすゑまでもひきぐし聞えて、命のあらむほどは、心やすくあらんと思ふを、いかには、君などのひがざまにの給ふことありとも、まろにしられ給はで、こゝろかろきことおぼしたつな」など、なぐさめかたらひ給ふ。

(『しのびね物語』三八頁)

・おとい(女君の)御袂に取り付き参らせて、「こはいかなる御事ぞや、淵瀬の底へも火の中へも離れ参らせ候ま

じ。いかならむ野の末山の奥までも引き具して渡らせ給へ。これに残り留まりて候とも、御恋しさの悲しさに命長らふべしとも覚えず」とて泣き悲しみければ、

（「しぐれ」二六頁）

さらに、同じく慣用表現であるが、親の心子知らずと同意の諺[9]が用いられている部分を比較してみる。

・「あさましきことかな。よしなきものに心をうつして、大将もいかにこゝちあしくおぼすらん。よにあらせんとおもへば、かくこゝろうく、おやのおもふばかり子はおもはざりけるよ」とて、かつはむつかりの給へば、ともかくも申給はでたち給ふ。（「しのびね物語」五四頁）

・殿も「かゝるべしとおもはゞ、何しに思ひよるべき、いかにも世にあれかしと思ふによりてこそ、大将のこともおもひたちしか、かくいたづらになすべきことゝやおもひし。親のおもふほど子はなかりけり」と。なき給ふことかぎりなし。（「しのびね物語」七六頁）

・母は嬉しき中にも落つる涙を押さへて、「姫君こそ御心強く渡らせ給ふ共、それには何とか音信し給はざるべき。あわれ、親の思ふ程にはなかりける」とて泣きければ、

（「しぐれ」三五頁）

「しのびね物語」では、両例がともに男君が正妻のもとへ通わないことを父親が嘆く場面に用いられているのに対し、「しぐれ」では、女君とともに姿を消したまま音信を絶っていた「侍従」に対する母の言葉として用いられている。もちろん、「しぐれ」にも「しのびね物語」と同じように、男君親子の確執は描かれているが、「しぐれ」では、主人公ではない乳母親子を通じて親子の情がよりはっきりと示されていることに注意するべきなのである。思えば、「しのびね物語」においては女君の最も身近にいる人物は、尼君と称される母親であり、また、女君と男君の間には子供が生まれ、そのために悲劇性も増大したのであった。一方、「しぐれ」の女君の両親は女君が八歳の時に亡くなっており、男君との間には子供も生まれない。代わりに乳母親子を通じて親子の情が説かれているのである。

なお、女君の乳母の娘「少納言」は二十歳、「侍従」は十八歳、男君の乳母の息子「六位の進」は二十四歳、娘「おとい」は十三歳、と言うように、乳母の子供達には具体的な年齢までが設定されている。「少納言」「侍従」「六位の進」のように、主人と同性で常にそばに仕える乳母子の年齢が示されるのは自然なことであろう。しかし、「おとい」は、

さて春日立ち帰り、娘のおとひを参らせけり。年は十三成、紅葉襲の七袮にあてやかに出立たせて参りたり。

（一二頁）

と、乳母「春日」の子として仰々しく登場し、

今年は十三なれば未だ幼きおとひが、姫君を見奉りて思ひけるは、あわれ頼みなかりける物は男の心かなと、

（二三頁）

とあるように、女君や男君を観察する人物として描かれているのだから、その視点にふさわしい年齢が与えられていると言える。

以上の点から、『しぐれ』は、乳母親子からの視点を通して主人公が描かれるとともに、乳母親子の言動が全体を支えている物語であって、〈しのびね型〉物語とは言っても、『しのびね物語』のような悲恋が主題ではないということが肯首されよう。このような視点から描かれた作品として考えれば、乳母や「少納言」を女房として迎える「侍従」の行動や、帝に会わせるために女君をだまして仏名会に誘う「侍従」や「内侍」の行動も、決して不合理ではなく、彼女達の現実的で賢明な生き方を描いたものととらえられる。冒頭に示した梗概も、乳母親子に目を向けてまとめ直せば、次のように彼女達の生き様を描いた物語として読むことが可能であろう。

清水寺に妹君を迎えにいった中将は、時雨に困っている女君を見つけ、傘を送る。女君は清水別当に見初められる。乳母と「少納言」は、身寄りのない女君の将来を思って別当に引き逢わせる準備をするが、賛同しかねる「侍従」は、隣の局で通夜をする男君に助けを求める。女君は中将の屋敷に迎えられ、中将の乳母の子「おとい」が仕えることになる。中将は右大臣家の姫君と結婚することになるが、男君が女君に執心のあまり右大臣家の姫君を軽く扱うので、右大臣家の乳母が呪詛を提案する。「侍従」は親類の「丹後の内侍」のもとに女君を連れ出す。「内侍」「侍従」は女君を仏名会に参加させ帝に会わせる。女君は帝に気に入られ后となり、「侍従」の母と姉「少納言」も女房として呼び寄せる。中将は呪詛が解けて事の次第を知り出家する。中将のもとに残っていた「おとい」も女君に仕え、「侍従」達はみな栄え、女君とともに幸せになる。

但し、他の物語でも、主人公をとりまく女性がある程度具体的に描かれることはある。『しのびね物語』にも、帝に女君のことをそれとなく告げて会わせようとする内侍の姿が描かれている。また、『住吉物語』などの古物語や〈しのびね型〉物語の『あきぎり』などにも女房が具体的に描かれており、『しぐれ』の女房像はそれらの物語の影響を受けているとも考えられる。しかし、『しぐれ』には、主人公である女君や男君以上に、「侍従」達の心情や言動が強く現れており、例えば、親子の情などの教訓性も彼女達を通して示されているという違いがある。

四

以上の考察を踏まえて『しぐれ』の清水利生を考えることとする。

『しぐれ』の末尾は、

（男君から送られた歌を）姫君御覧じて猶も恋しくおぼしめして、妃の位にならせ給へども露も嬉しともおぼされず。御心の内には、あわれたゞ契りしまゝに中将殿と一つ庵に住みて憂き世を過ごさばいかに嬉しかりなむとおぼしける。されども力及ばせ給はず、いよ〳〵目出度栄へ給ひけり。

姫君の果報も、中将殿の真の道に入給ふも、皆これ観音の御利生なり。（五二頁）

と結ばれている。清水の利生譚としてまとめるのは、因果応報を説くお伽草子らしい手法でもあり、清水寺での出会いから始まる『しぐれ』は確かに清水の利生譚として構成されている。しかし、結局結ばれなかった二人のことを観音の利生として説明するの難しい[10]。姫君と中将の視点から成り立つ利生譚であれば、例えば次のようにあるべきだろう。

幼少からともに育った男君と女君は子供を儲けるが男君の父が無理に別の結婚をすすめ、女君を追いやる。女君は世をはかなみ入水するが清水の観音の利生により助かり男君と再会し末永く栄える。

これは『しぐれ』と同じく〈しのびね型〉のお伽草子『若草』のある一系統の場合であるが[11]、このように、男君と女君の現世または来世での再会を描いたり、或いは、たとえ結ばれなくとも、女君の繁栄とともに男君の悟りや往生などを描くのが、利生譚としては自然なのではないだろうか。俗世に未練を残す男君のことまでをも観音の利生であると説明するのは困難である。しかし、それでも『しぐれ』は清水寺の利生譚の形をとっている。これを説明するには、前述したように、『しぐれ』では「侍従」や「おとい」の視点が重視されており、彼女達によって親子の情や賢い生き方といった教訓性が示されていること、つまり、乳母親子の視点と言動が物語全体を制御しているということに目を向けなければならないのである。

最後には、

御乳母は大納言の典侍の局、少納言は兵衛佐の局、侍従は左衛門佐の局とて、取り分け御芳心ありけり。おとひは又、中将殿の縁とおぼしければ殊に懐かしくおぼしめす。皇子の御乳母とありながら大納言の二位になされ参らせて、侍従とおとひとは取り分け世の覚えもいみじくして、よろづ楽しみ栄へけり。（五二頁）

と栄華を極める女房達にとっては、女君と男君の出会いと別れも女君の入内に繋がる機縁であったのだ。末尾の一文は乳母親子に焦点が置かれた叙述の結果現れてきたものと言えよう。『しぐれ』における因果応報や教訓性といったお伽草子らしさは、女房に着目することによってようやく理解されてくるのではないだろうか。女房の視点が新しい趣向や主人公の動きまでをも支えているなどということについて、『しぐ

れ』作者は、無意識だったかもしれない。しかし、お伽草子を論じるのであれば、お伽草子らしさを背後で支える物語の論理を踏まえて読み解く必要があるだろう。

注

(1)『しぐれ』と周辺の物語に関する論考には、本文及び後掲の注で取り上げた諸論のほか、松本隆信氏「擬古物語系統の室町時代物語―「しぐれ」「若草」「桜の中将」「志賀物語」外―」(『斯道文庫論集』四　一九四五年三月)、松井澄子氏「「しのびね」物語の変貌―現存本「しのびね」と「しぐれ」との比較―」(『平安文学論究』六三　一九八〇年七月)、三角洋一氏「改作物語の和歌」(『物語の変貌』若草書房、一九九六年)などがある。

(2)『恋に身かふる』との関係は、『風葉和歌集』(巻七・釈教・四九四)に、「おなじてら(清水寺)にこもりて、思ふ事かなふさまに侍りければ／恋に身かふる頭中将／あなたふとかれたる木にも花さくととける誓は今ぞしらるる」とあるのが、『しぐれ』の「たのもしく枯れたる木にも花咲くと説ける誓ひは今ぞ知らるゝ」という男君が清水で女君に出会った喜びを詠んだ歌と初句を除いて一致することが根拠となっている(中野荘次氏「風葉和歌集考(下)」(『国語国文』一九三三年三月))が、『梁塵秘抄』(巻二・三九)に、「万の仏の願よりも、千手の誓ひぞ頼もしき、枯れたる草木も忽ちに　花咲き実生ると説い給ふ」とあるように、類歌も多い。第四節で取り上げた慶應義塾図書館蔵本『若草』にも、「いまもむかしも、きよみつの、くわんせをんこそ、あらたにて、かれたる木草も、はなさくと、きけ」(『室町時代物語大成』一三　六四四頁)とある。

(3)辛島正雄氏「擬古物語とお伽草子の間―新出『あきぎり』物語をめぐって―」(『文学』一九八八年一月)

(4)『しぐれ』の趣向に注目した論文に、沢井耐三氏「『しぐれ』の趣向二題―時雨の出会いと呪詛―」(『愛知大学文学論叢』一〇四　一九九三年十月)がある。

(5)神野藤昭夫氏「『しのびね物語』の位相―古本『しのびね』・現存『しのびね』・『しぐれ』の軌跡―」(『散逸した物語世界と物語史』若草書房、一九九八年)

(6)以下、『しぐれ』の本文引用は、新日本古典文学大系『室町物語集』下(大東急記念文庫蔵永正十七年写本)による。(　)内は引用者による注記。頁数は同書による。なお、本稿冒頭の平出氏の『しぐれ』引用本文は、『雨やどり』と題名が改刻された刊本によっている。

(7)以下、『しのびね物語』の本文引用は、『鎌倉時代物語集成』による。頁数は同書による。

(8)本文中に示したほか、「いかなる野山のすゑまでもひきぐし聞えて、命のあらむほどは、心やすくあらんと思ふを」(三九頁)、「いづかたへも引ぐして、野にも山にもあくがれまほしくおぼせど」(四二頁)、「みづからこそいかなる野山のすゑにもとぢこもらめ」(六四頁)など、六例が見られる。本誌所収の加藤昌嘉氏論考を参照されたい。

(9)例えば、『住吉物語』(新日本古典文学大系・慶長古活字十行本)には「親の思ふばかり、子は思はぬ事の心憂さよ」(三二四頁)をはじめ、三度も用いられている。

(10)例えば次のような解釈が示されている。沢井耐三氏「冒頭に

清水寺の別当の不道徳を描きながら、巻末に清水の利生を説くのは、あまりにも強烈な逆説、でなければ皮肉といえよう。ただどちらにしても『しぐれ』作者は、清水寺に対して常識以上の崇敬の念を持ちあわせていなかったことは確かであろう。」（注(4)前掲論文）、豊島秀範氏「末尾で、清水観音の霊験譚の形を採ることによって、中将・承香殿女御の両者の立場を救済しているのである。」（「『しぐれ』論―中世物語の展開―」（『物語文学史』おうふう、一九九四年））、神野藤昭夫氏「一見取ってつけたような不自然な印象を与えるが、再考してみると、〈しのびね型〉の筋を踏襲しつつも、初めから女君は帝と結ばれ栄華の道をあゆむべく仕組まれていたし、男君は悲恋から遁世すべく仕組まれていたのであった。だから、末尾の一文は単なる付加ではなく、物語がそのように収斂するような構造に変質させられていたわけで、微妙だが紛れようもなく、『しぐれ』は、古本・現存本両『しのびね』との質的懸隔をもっていると判断できる。」（注(5)前掲論文）など。

(11)松本隆信氏「増訂室町時代物語類現存本簡明目録」（奈良絵本国際会議編『御伽草子の世界』三省堂、一九八二年）で示されるB系統、『室町時代物語大成』一三所収の慶應義塾図書館蔵写本による。他系統では女君は入水自殺、男君は出家往生という結末で清水の利生は説かれない。

（みのうら・なおみ　本学大学院博士後期課程）